



平成四年三月
各務原市資料調査報告書第十五号

市川百十郎資料目録

各務原市歴史民俗資料館



市川百十郎資料目録



口絵13



口絵12



口絵9



口絵8



口絵15



口絵14



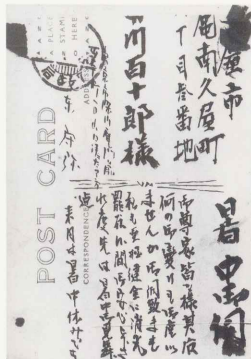
口絵11



口絵10



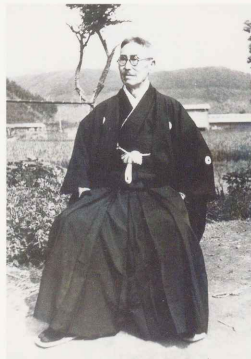
口絵21



口絵20



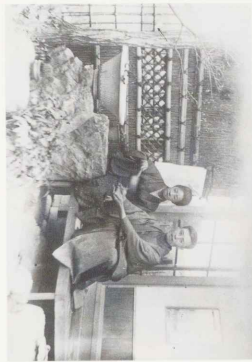
口絵23



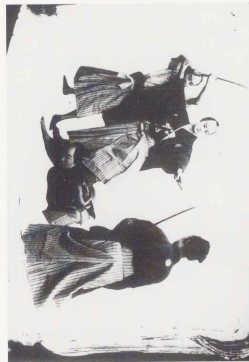
口絵22



口絵25



口絵24



口絵26



口絵27

序

ここに「市川百十郎資料目録」が刊行できますことを、誠に喜ばしく思います。

さて市川百十郎は、各務原の生んだ有名な旅廻り役者であります。現在もなお、「各務の舞臺」として国の指定を受けている村国座では、各務地区の児童や大人たちの努力によって、農村歌舞伎の灯がともし続けられているように、市川百十郎の人生は、地芝居の盛んな土地柄で生を受けたことに大きく影響されました。そのため、旅廻り稼業をやめて地元に戻すえてからも、周辺地域の青年たちに演劇指導をするという形で、地域に貢献してきました。また、旅廻りの生活で故郷を離れていた時代にも、境川沿いの堤に桜の苗木を植えるなどの思いを抱き、苗木を寄贈しました。そのかいあって、現在のような見事な桜並木となりました。

最近とみに、地方自治のあり方や地域おこしについて取り沙汰されることが多いです。有名な明治時代の民俗学者であった柳田国男は「郷土で郷土を」という地域のとらえ方を述べています。当世風に言えば、「地域で地域を」ということになりましょうか。このことは心で思ってみても、あるいは口から出る言葉で言ってみても、実際にやろうとなると大変なことであります。その点、桜の苗木の寄贈一つをとってみても、市川百十郎の肩肘張らないさりげない行為が、如何に偉大な行いであったか改めて実感されます。

旅廻り役者という一見華やかな稼業の中にも、平凡な民衆の一人として奮闘の時代を生きた人物の関係資料を大切にしていくことは、地域に根ざす地方行政のあり方を求めることにつながっていきます。本報告書が、わたしたちの身近な先人の足跡を広く市民の皆さんに知っていただくとともに、「地域で地域を」意識で、町おこしのエネルギーが広がるためのきっかけ作りにもなれば幸いでありました。

終わりにあたりまして、本報告書の発行にご尽力下さいました方々に、心より感謝いたします。

平成四年三月

各務原市教育長

水野定之

市川百十郎資料目録

目次

序

目次

凡例

市川百十郎資料について―足跡と資料の特色―……………一

I はじめに……………二

II 市川百十郎の略歴……………二

III 市川百十郎の人となりの一側面……………三

IV 遺品資料の概要……………七

市川百十郎資料目録……………二

一 日記関係……………二

二 備忘録関係……………二

上面日数記録……………三

三	通い帳および万覽……………	三
三	生活關係……………	三
三	新聞……………	三
三	地図……………	三
四	絵はがき……………	四
五	その他……………	五
六	興行・一座關係……………	六
六	大・小道具關係……………	六
七	活動写真映画説明書および認可証關係……………	七
七	日本舞踊關係……………	七
七	演劇素材資料關係……………	七
七	外題關係……………	七
〇	資料年月日判明分……………	〇
〇	資料年月日未詳分……………	〇
三	続き物……………	三
三	一幕物……………	三
六	脚本關係……………	六
九	歌舞伎脚本……………	九
九	青年歌舞伎・新劇脚本……………	九

三三	大正八年「清帳」(影印)……………	三三
----	-------------------	----

三〇	演劇脚本……………	三〇
三三	一 衣裳關係……………	三三
三三	編集後記……………	三三

凡 例

- 本報告書は、各務原市出身の旅廻り役者、市川百十郎の遺品の内、各務原市歴史民俗資料館へ永久寄託された資料分の目録である。
- 本報告書は、口絵、資料解説、目録、影印の四部構成からなっている。
- 口絵の部は、興行広告の一部と上演風景および生活の一瞬を写したものの写真を取録した。
- 資料解説は、一部分、新聞記事を転載してある。
- 転載した新聞記事は、市川百十郎の登場する新聞記事のうち、百十郎の人となりにかかわるものや各務原市と関係の深いものを選んで取録した。
- 転載の新聞記事は、送り仮名はそのままとし、それ以外の疑問な箇所には（マ）を付けた。
- 目録は、便宜上、一―種類に分類して取録した。
- 目録の分類の大項目は、それぞれ日記関係、備忘録関係、生活関係、興行・一座関係、大―小道具関係、活動写真映画説明書および認可証関係、日本舞踊関係、演劇素材資料関係、外題関係、脚本関係、衣裳関係とした。
- 目録の外題関係の分類は、付随座子供歌舞伎の振付け指導者である、当市在住の大谷白菊（乳補きぬえ）さんから指導を受けた。
- 目録中で使用した漢字は、原則として常用漢字表に準拠したが、形の著しく変わる文字については、原則に従って旧漢字を使用したところもある。
- 外題は、歌舞伎特有の表現と考え、当て字のまま使用した。
- 目録中の題名の中には、原題を尊重しつつも、便宜的に仮題を付けて載せたものがある。
- 大正八年の「清帳」は、上演契約の履行覚えにあたるもので、市川百十郎の興行実態を探る上で貴重な資料であり、特に影印取録した。
- 本報告書の資料解説は、歴史民俗資料館の上村恵宏がまとめた。
- 写真図版および校正等は、歴史民俗資料館の斎藤文彦・上村恵宏・足立秀成・佐藤浩子が担当した。

市川百十郎資料について

— 足跡と資料の特色 —

市川百十郎資料について

— 足跡と資料の特色 —

I はじめに

「市川百十郎資料」の寄託をうけた各務原市歴史民俗資料館では、平成一年度から関係資料の整理および調査作業を進めてきた。その間、市川百十郎の足跡について、日誌を眺めることから明らかになった成果が、当館の『資料館だより』第五号（宮崎県）で紹介された。また、当館蔵資料の一部が岐阜県歴史資料館で展示された。その時の調査の成果も岐阜県郷土資料研究協議会会報（第五九号『早野博』）で公表された。

これらを中心に、歌舞伎役者市川百十郎の足跡を位置づけた作業である。上記の成果も参照しながら、以下、市川百十郎資料の解説を行う。

II 市川百十郎の略歴

市川百十郎は本名を加藤とす。明治十五年（一八八二）五月一日、稲葉郡大島村（現各務原市蘇原大島町）で加藤赤作・なか夫妻の長男として生まれた。古市場村蘇原庄をはじめ、各務村村園座や羽場村楽座など、近隣諸村が立派な農村歌舞伎の舞台を有していたことから知られるように、地芝居・農村歌舞伎の盛んな土地柄に育ったこともあって、幼少の頃より、青年たち

の演じる歌舞伎を好んだという。

明治三〇年創作は、父母の承認のもと、名古屋に在住する父方の叔母を介して、一五歳で上京し、歌舞伎役者の三代目中山喜楽に弟子入りした。師匠の喜楽は当時、東海地域で一番名声の高い役者であり、師匠から一字をもらって中山英枝を名乗った。その後、明治三六年まで、中山喜楽の旗廻りに参加して、修行時代をおくった。翌三七年には、中村雀仙一座の看板役者になったが、一年間ほど日露戦争で徴発された。三九年に復員し、知人と一座を組み、巡業活動を再開した。

明治四〇年に師匠の中山喜楽をうけたが、四三年に中山英枝は芸名を師業と改名した。その間、兄弟子でもあった歌舞伎界の大御所、市川八百蔵（中恵）の門に入って、大正元年（一九一〇）八百蔵から最終芸名となる市川百十郎の芸名を貰い受けた。

その後も芸道に精進を続け、昭和五年（一九三〇）には「全国新田俳優見立大番附」（口絵四）の中で年収九千〇〇の前頭位置づけられ、歌舞伎界の大立者として名声を博すようになった。このように百十郎が役者として名声を博すにいたった理由は、歌舞伎に連鎖劇の手法を取り入れたことにある。

連鎖劇というのは、舞台では不可能な演技を連続映画・連続活劇で演じながら、舞台演劇と組み合わせ、より活動的な芝居を行う形式のものであり、関西で発祥し、関東に波及した。活動写真連鎖劇の名称は、明治四三年に沢村嘉之助が東京の宮戸座で

演じた「女ざむらい」に始まるといわれている。特に、東京の本郷を活動拠点にし井上正丈の活動が目立った。新鮮さと俳優の熱演で、大正前期半には青柳を中心に人気を博した。しかし中央では、観客層の目が肥えていたことから、舞台芝居に比較し、連続映画そのものが劣りするというところもあって、大正中期になると早くも衰退した（『大衆文化事典』）

市川百十郎が連鎖劇を始めたのは、大正八年である。彼はそれまで行っていた歌舞伎連鎖劇手法を取り入れた。また、芝居の外題についての研究も熱心で、寺社縁起あるいは新聞小説や小説誌単行本などから精力的に演劇の素材を集めた。当資料収録の生活関係の項目をみると、百十郎の巡回興行の足跡と、興行役者の途中でも演劇の素材を求めようとする、貪欲なまでの役者魂を読み取ることができる。

III 市川百十郎の人となりの一側面

市川百十郎の人となりを理解するために、いくつかの新聞から関係記事拾い上げてみた。

除に「老人の夢」復活する名所、境川堤のサクラ

鶴沼地区を観光地にする名所、境川堤のサクラ
蘇原地区を流れる境川堤のサクラの名所として宣伝、開演することになった。だが、この除には三十余年間、同堤がサクラの名所になることを夢みてきた老人がいる。

同市蘇原の市川百十郎さん（八三）で、市川さんは十五歳市川百十郎資料について

のとき役者を志して上京、古い人たちはなじみ深い、「中山喜楽」が八百蔵一座を経て立花屋百十郎一座の座長までつとめた。嫁から旅への生活だったが、いつも子ども達の製菓からなれなかったのは郷里境川の情緒にうたれ、ふとサクラが上がってきたらさう思いつき百十郎の苗千本を密贈し、境川堤一帯に植えた。昭和六年のことだった。

サクラは順調に成長し、毎年春には美しく咲き乱れるようになったが、太平洋戦争の悪化とともにうらばなくなった。サクラの木は防空壕の柱や版戸に無惨にも乱伐されてしまった。戦後、役者を引退し郷里にもどった市川さんの心を痛めさせてきた。

それでも残った数本のサクラは春になると花を咲かせ、それは樹齢三十余年の名木になったが名所にしては観光施設がないという宣伝もされていなかったのを忘れられた存在だった。

一方、各務原市観光商では鶴沼地区に観光地をつくらうと、計画をたててになり、この境川堤のサクラを中心に、観光開発を進めることになり、うらば今シーズンと同堤に三百本のサクラの苗を植え、昔の名所に復活するほか、観光客を誘致できるようにベンチや茶店の設置も計画、また中電では近頃堤一帯に大銀行を建設すると、市川さんの念願が

ようやく実現する日がやってきました。昭和三八年（一九六三）六月六日『岐阜日日新聞』

ある米寿

このほど市川百十郎丈から「米寿を迎えた記念に」と、若見重太郎の舞台写真を送ってきた。裏を返してみると大正十三年撮影とある。昭和四十年、私は偶然のことからはとん五十十年ぶりに彼と会った。その時は彼に「あなたの若見重太郎を、いまもハッキリ覚えていますよ」と話した。彼はそれを喜んでくれたのである。百十郎は大正七、八年ごろ名古屋の場末小屋に出ていた役者であった。私はまだ小学生で母に連れられて何度も彼の芝居をみた。カブキもやったり、印象に残っているのは立川文庫の「石居重太郎」田宮坊太郎「薄紅華人」といった外国の旧劇であった。当時流行した活動写真をはさんだいわゆる連鎖劇で本当に呆くら面白かったのである。

その芝居小屋が私の住んでいた町に近かったせいで、昼間ときどき表を通る素顔の百十郎をみかけた。青白い鼻筋の通った細面に、金フチ眼鏡を掛けて、こともないいい男だな。と思ったが、そのころすでに不惑の年を越えていた彼だから、小学生の私が話しかけるすもななかった。白く塗った舞台顔が若々しく、口跡が音吐朗々として、いまの寿海のせりふをきくようなさわやかさがあった。

昭和二十九年の一月五日深川神社の初えびす祭に、本社が協賛して「瀬戸名士七福神行列」というのを第一回として主催。昭和三十三年まで、十回連続して、瀬戸の名士、男子六十八、弁財天に扮装する藤さん十八人、それに福の神の家をやっていたのが八十人、合計八十人が毎年石神々社において、岐阜市から加藤シズエさんという衣家方に来て貰いお化粧はいつも名古屋の土屋さんであって、短時間に顔造り、着付けに骨折って下さった。その加藤シズエさんは名士七福神に参加の方々は記憶に残っています。又、瀬戸地方における西川の舞踊発表会などにはいつも頼まれて来られた加藤シズエさん。この人のご主人、俳優市川百十郎丈（本名加藤別作氏・当八十八）について書こう。

三、四年前に岐阜市外へ各務原市蘇原町大島の市川百十郎さんの宅を訪ねた。お話を聞いた。――

「瀬戸にも座や陶居座、歌舞伎座、興行座に来られたことがあり特に旭島の新居では御大典奉祝に村芝居をやるというので頼まれて泊りがけでけいこをつけに来たことがある」と語っておられた。

「瀬戸・明治百年」、市川百十郎、百という字に何か縁がありそうと、八十八才の米寿を祝う意味もかねて各務原市の大島に、去る十二月七日、市川百十郎宅をお訪ねした。

目は不自由で新聞などは読めなくなりながら元気に喜んで

市川百十郎資料について

それから二十年近くしたら、私は新聞記者になっていた。あの博覧会の取材にかけて、場内を回るうち、聞き覚えのある声を耳にした。「百十郎の声だ」彼は二十年間同じく金フチ眼鏡を掛けて場内解説をやっていたのである。この時も私は彼を返すことはなかった。

「それ以後彼を見る機会はなかった」と、私は百十郎の思い出を、こういう文章で結んだ一文にして、ある地方雑誌に寄せた。編集者の注文が「百にちなむ随筆を」ということだったので、昭和四十年の五月のことだった。ところが彼は岐阜県に難産で亡くなった。特殊な雑誌だったが偶然にも彼の目に触れることになり「懐かしいから会いたい」と私に連絡してきた。南京（なんきん）豆をカサリながら彼の芝居を見ていた少年フランは、約五十年ぶりに市川百十郎丈との正式会見が実現した。そのうち――

「からだを大事にして、きし当りませう八十八の坂を越えてと彼を助まして別れた。だから私は写真の礼状に「ごんどは白寿を迎えよ」と書いた。残善殿しい立秋の日であった。（織田総本社新聞総合研究室長、昭和四三年（一九六八）八月〇日）『中日新聞』夕刊』紙つて）

市川百十郎翁夫人は瀬戸名士七福神行列の衣裳着付の加藤シズエさん

迎えられ、昔かたりに二時間近く聞いた。

「私はこの大島のご家を生れました、十五才のとき役者志して、東京に行きまして、古い人とはおなじみの「中山喜楽」の弟子になりましたが、喜楽が引退しましてから市川八百藏、後に市川中車を襲名する人」の弟子になり、八百藏の百を貰い市川百十郎と名乗ったのです。

名古屋では、鶴屋町の京舞座は常打ちでした。京舞座が百十郎か、百十郎が京舞座か」とまでいわれられたね。私の出し物は、なんといっても、名古屋新聞連載の「黒トカゲ」だけでしたね。あれは東下は勿論、近県各地を巡業し、ずいぶんやりましたよ。その外、連鎖劇で若見重太郎「薄紅華人」「田宮坊太郎」が、当りました。私が「枚目としての奇り狂言は、松玉丸」でしたかね、特に「田宮坊太郎」劇で私は「御生飛脚守をやりましたが、これが私の十八番のよう気がしますが」。写真は御生飛脚守です（「絵巻」）まあ、新聞や雑誌でやったものも集めて持っていますが、今でいうマスコにも可哀がっていただきますし、お客さまにも、ほんとはひいきにしています。

八十八才になっても隠居になっていませんが、いまだに昔ながら、たづね下さったり、お手紙をいただきます、感謝しております。

又、家内のシズエがごひいきにあづかり、各地から引っぱ

らでこで、踊りなどの衣裳方、着付として走り廻らせていた
だいております。全く有難いことであります。」(安藤政次郎、
昭和四四年一月一日「大演劇」第三三十九号)

百十郎様

昨年夏、私は本欄で「ある米寿」と題し、旧劇役者、市
川百十郎に五十年ぶりに会った話を書いた。百十郎は私が幼
年時代、母に連れられ見に行った場末小屋の役者である。そ
の百十郎が米寿を迎えたとを喜んだ内容のものであった。
その百十郎がなくなつた。先週の土曜日である。

百十郎の家、各務原市、すぐ近くに境川が流れている。川
幅十メートル、だが水は乏しく、実際は一メートルたらずの
幅をテロテロ流れる小川である。その川の両側にビッシリ
り板が並んでいる。この百本以上もある板は百十郎が昭和五
年に寄付して、植樹したものである。その旨を記した碑
(石除二二三)が橋のタモトにある。高さ一メートルほどの粗
末な彫影石で地味な感じの碑である。

昨年の暮れ、病床の徳を見舞つたとき「あの板が壊れくろ
までよくなって、花見をやろうよ。あの並み木はすばらし
いじゃないか。百十郎様を命名したらどうだ」と私は励まし
ひとりではいやいだ。あの一文以来、彼の健在を知って彼に
会いに行く人が相つた。それを彼はひどく喜び、涙ぐみな
がら私に話した。半世紀も前、町の片々で見た旧劇や連鎖

劇に強い郷愁をいだき、百十郎をなつかしがる人々が以外に
多いことがわかったのである。

葬儀は日曜日、前夜来の雨が上がった暖かい日だった。彼
のなきがらを送り、野辺送りの人たちとも別れて、私はひと
り境川の土手に出た。たそがれとなるとき、さすがに早春の風
が冷たく、板のツボミは堅かた。こんなに見事な板並み木
なのに(花見のドンチャン騒ぎは全くない)と組内の若い人
はいった。市も町も、この並み木を宣伝していないようであ
る。

一年、水戸事のため、二三本切り倒したのですが、
倒してみると大変いいことがわかりました。幹はつかえもあ
る。その根がどんと入伸びて土から田んぼまで張っている
のですよ。手入れも脚料もやらないのですが、肥料は田ん
ぼから吸い上げられるんですよ
と若者はいっただ。

たそがれそかに歩き、ひそかに散っていく、ひとにぎりの土
とわかな水だけがその美しさを一つしつづけたのであろう。
だが根だけはの土地の土壌にしっかりとかりこんでいるので
ある。それは百十郎の生涯そのものではないか。私は深く息
を吸い、美濃の暮色の中立ちつづけた。(後田稔「本社新聞
総合研究室長、昭和四四年三月一日「中日新聞」夕刊、紙つ
ぶて。)

IV 遺品資料の概要

「市川百十郎資料」は、故人の遺志をくんで、未亡人の加藤忠
子おさん(平成三年五月他界)から希託された。資料総点数は一
九〇九点である。

「市川百十郎資料」はいわゆる文字資料と写真・絵がき・
地図および芝居衣裳・小道具類等からなっている。特に、文字資
料としては、歌舞伎の外題や連鎖劇の脚本に関するものが圧倒的
多数を占めている。その他、日記類をはじめ、興行の途中で立ち
寄つた地域の地図や・名所跡案内・寺社縁起なども豊富である。
また、雑誌類や説本(小説)類も多い。

日記類は、明治(一九〇三)から昭和(三九年)(一九六四)
までのものが一部の年を除いて揃っており、文化史や民衆史の観
点から、旅廻り役者の一生を追跡調査する上で、大変、貴重なも
のである。

さて、雑多とも思われるほど残存する、立ち寄り先の地図や名
所旧跡案内・寺社縁起等は、興行の合間に余暇を棄しむ目的で訪
れ、その都度、入手したものであろう。けれども、百十郎の興行
記録や連鎖劇をはじめとする芝居の脚本を見ても、単なる出来
ごとで立ち寄り買求めたものではないと理解すべきである。そ
れは、同様に多く保存されてきた、雑誌類や説本類も含めて、
芝居の脚本と比較することによってみえてくる。すなわち、百十
郎による貪欲なまでの演劇素材の探求開発の動向に気がつくこと

である。まさに役者魂というべきか、専門業者としての、役者様業
に生きる人間の生き方をみることが出来る。

一方、これらの資料は、別の意義も有している。すなわち、東
北から九州にわたる国内地図は、戦前における各県の地勢を知る
上で有益な資料である。また、当時の風景を伝える絵がきも、
それを介して現在の状況と比較する上で、同様に価値があるとい
えよう。

百十郎資料の二つ目の特徴は、連鎖劇の担い手の一人であった
役者の遺品にふさわしく、連鎖劇のフィルムを比較的豊かに残し
ていることである。文化活動を制約していた時代の興行活動で
あったことを明白に伝え、内務省検閲を受けた証跡を残すもの
も存在する。そのような状況下で、役者魂の強い百十郎が、検閲
で認可を受けるために、作付くりの中で如何なる工夫を凝らし
ていたか、連鎖劇のフィルムとともに、外題の内容を検討してみる
価値がある。

三つ目の特徴として、青年歌舞伎の脚本類の存在を指摘したい。
すなわち百十郎は、旅廻りの歌舞伎役者ではあったが、自分が居住
している地域の農村青年による地芝居でもあり、劇団創立代公会
の演劇クラブ員などの演劇指導もしていた。脚本の成立年代の判
明する四点から推すると、青年たちの演劇指導にかかわりをも
つようになったのは、戦後、出身地に帰る落着けてからのよう
である。旅廻りの連鎖劇をやらなくなった芝居に対する情熱は

強く、そのことが青年歌舞伎の指導に向かわせる原動力になったと考えられよう。その結果、地方郷土文化（地芝居）の発展にも貢献したのである。

次に、やや細かく分類項目ごとにくわいていくことにする。

一、日記関係

全部で四五点である。目録の日記帳の名称は、史料の名称を使用した。「懐中日記」とか「寶日記」というのは、日記の発行社ごとに付けている名称である。中には、表題が「清帳」あるいは「清算帳」となっているにもかかわらず、中身は一般の日記となっていたものもあり、表題を無視して日記帳の項目に加えた。

二、備忘録関係

全部で〇点である。その内、上演日数あるいは開演回数にかかわるものは五点であるが、表題からは中身が読み取りにくいものもあり、目録には表題名を載せながらも、内容に基づく分類によつて載せた。通番四八の「清帳」は通番四七の「開演日数帳」とほぼ対になっており、実施計画にある「開演日数帳」に対する実施策である。上演場所をはじめ市川百十郎の旅廻りの動向や上演内容がつかめる貴重な資料であるため、特に「清帳」のみ影印で収録した。

金銭出入など、いわゆる口算帳にかかわるものや買物の通い帳にかかわるものは、全部で一五点である。役者種業にふさわしく、白粉・下駄・衣袋などに関する通い帳や、一座の役者への支払い全部で三八点ある。照明習員以外は芝居の小道具類の分類に入る物である。興行・一座関係の小道具帳など対応させて利用できる。

六、活動写真映画説明書および認可証関係

全部で二五点である。戦前の思想統制とのかかわりから、あらかじめ当局から上演内容の検閲を受ける必要があったことを示すもので、興当局あるいは内務省当局の検閲印の付いているものもあれば、両方の検閲印を必要とするものなど、次第に思想統制が強化された痕を残せる資料もある。これらの資料と対になっているとみられる、三ミリの映画フィルムが九本存在する。

七、日本舞踊関係

全部で五点である。日本舞踊に関する雑誌あり、踊りの研究のために買いまめたものである。

八、演劇素材資料関係

全部で一五五点ある。雑誌や単行本の小説、あるいは寺社縁起・伝記類などから、広く演劇の素材集めをしたことが推察される。

九、外題関係

全部で七二七点である。その内、資料年月日の判明分が一〇八点ある。また、資料年月日未詳のもの内、続きものとみられるものが二九六点で、一幕ものが三三二点である。

一〇、脚本関係

市川百十郎資料について

に関するものが多い。

三、住居関係

全部で五二三点である。その内、新聞が二点、地図が四一点、絵はがきが四二六点、その他が三五点である。

地図類では、昭和初期から昭和〇年代の各県全国が二府県分と、東京・京都・名古屋の三都市分市の市街地図が存在する。百十郎の興行の軌跡を知ると同時に、戦前の国内地図を、各県全国水準で知ることもできる貴重な資料といえる。

絵はがき類では、興行の合間に訪れたとみられる名所旧跡や神社仏閣に関するものが多く、戦前の風物写真などは、なかなか得難い資料の一つである。演劇素材資料関係に分類した寺社縁起類と対をなす場合が多く、前後の各県地図と合わせて使えば、百十郎の旅歴をたどる上で貴重な資料となる。

その他、前述の分類に入らない物が三四点あり、百十郎個人の生活や性格、人付き合いなど、日記をいっしょに使えば、彼の生活の内幕にまで理解を深める手がかりになりやすい資料である。

四、興行・一座関係

全部で一〇七点ある。特に、連鎖劇などの興行広告が多い。劇場名の入っている物が六点あるが、大半は、劇名を書き込むようになっている鑑別ばかりである。とくに数色にわたる魚廻りの物が多い。

五、大、小道具関係

一般的な外題というよりも、演劇の脚本といったほうがきわしいものを分類したところ二七二点になった。その内、歌舞伎脚本に関するものが六二点ある。また、農村部の青年や会社関係などの演劇クラブにかかわる脚本と思われるものが二二点ある。これらは主に青年会などの芝居指導あるいは脚本監修にかかわる資料である。市川百十郎が、旅回りの役者生活をやめてからも、周りの青年たちを相手に地方演劇文化の指導で貢献していたことを証明する貴重な資料である。以上の外に、自作の演劇脚本が二〇九点ある。

一、衣裳関係

歌舞伎や連鎖劇に関する衣裳は全部で七二七点のぼった。旅廻り一座の所有する衣裳類であった。本歌舞伎の衣裳類と比較して、素材面でかなり見劣りがするのは否めない。また、一部の衣裳については、この芝居にどの衣裳を使ったかまでわかるものがあり、顧客向けを外題に比較的質のよい衣裳を使用していたことが想像される。

市川百十郎資料目録

市川百十郎資料目録

通番 史料年月日 史料の名称

通番	史料年月日	史料の名称	点数
一	明治三十六年九月	日記帳	一
二	明治三十九年一月	懐中日記	二
三	明治四十四年一月	懐中日記	二
四	明治四十四年三月	懐中日記	二
五	明治四十四年六月	懐中日記	二
六	明治四十四年九月	三寶日記	二
七	明治四十五年一月	懐中日記	二
八	大正三年一月	懐中日記	二
九	大正三年一月	懐中日記(無記入)	二
一〇	大正三年一月	懐中日記	二
一一	大正三年一月	三寶日記	二
一二	大正三年一月	懐中日記	二
一三	大正三年一月	三寶日記	二
一四	大正三年一月	懐中日記	二
一五	大正三年一月	懐中日記	二
一六	大正三年一月	懐中日記	二
一七	大正三年一月	懐中日記	二
一八	大正三年一月	懐中日記	二
一九	大正三年一月	懐中日記	二
二〇	昭和二年一月	懐中日記	二
二一	昭和三年一月	懐中日記	二
二二	昭和三年一月	懐中日記	二
二三	昭和三年一月	懐中日記	二
二四	昭和三年一月	懐中日記	二
二五	昭和三年一月	懐中日記	二
二六	昭和三年一月	懐中日記	二
二七	昭和三年一月	懐中日記	二
二八	昭和三年一月	懐中日記	二
二九	昭和三年一月	懐中日記	二
三〇	昭和三年一月	懐中日記	二
三一	昭和三年一月	懐中日記	二
三二	昭和三年一月	懐中日記	二
三三	昭和三年一月	懐中日記	二
三四	昭和三年一月	懐中日記	二
三五	昭和三年一月	懐中日記	二
三六	昭和三年一月	懐中日記	二
三七	昭和三年一月	懐中日記	二
三八	昭和三年一月	懐中日記	二
三九	昭和三年一月	懐中日記	二
四〇	昭和三年一月	懐中日記	二
四一	昭和三年一月	懐中日記	二
四二	昭和三年一月	懐中日記	二
四三	昭和三年一月	懐中日記	二
四四	昭和三年一月	懐中日記	二
四五	昭和三年一月	懐中日記	二
四六	昭和三年一月	懐中日記	二
四七	昭和三年一月	懐中日記	二
四八	昭和三年一月	懐中日記	二
四九	昭和三年一月	懐中日記	二
五〇	昭和三年一月	懐中日記	二
五一	昭和三年一月	懐中日記	二
五二	昭和三年一月	懐中日記	二
五三	昭和三年一月	懐中日記	二
五四	昭和三年一月	懐中日記	二
五五	昭和三年一月	懐中日記	二
五六	昭和三年一月	懐中日記	二
五七	昭和三年一月	懐中日記	二
五八	昭和三年一月	懐中日記	二
五九	昭和三年一月	懐中日記	二
六〇	昭和三年一月	懐中日記	二
六一	昭和三年一月	懐中日記	二
六二	昭和三年一月	懐中日記	二
六三	昭和三年一月	懐中日記	二
六四	昭和三年一月	懐中日記	二
六五	昭和三年一月	懐中日記	二
六六	昭和三年一月	懐中日記	二
六七	昭和三年一月	懐中日記	二
六八	昭和三年一月	懐中日記	二
六九	昭和三年一月	懐中日記	二
七〇	昭和三年一月	懐中日記	二
七一	昭和三年一月	懐中日記	二
七二	昭和三年一月	懐中日記	二
七三	昭和三年一月	懐中日記	二
七四	昭和三年一月	懐中日記	二
七五	昭和三年一月	懐中日記	二
七六	昭和三年一月	懐中日記	二
七七	昭和三年一月	懐中日記	二
七八	昭和三年一月	懐中日記	二
七九	昭和三年一月	懐中日記	二
八〇	昭和三年一月	懐中日記	二
八一	昭和三年一月	懐中日記	二
八二	昭和三年一月	懐中日記	二
八三	昭和三年一月	懐中日記	二
八四	昭和三年一月	懐中日記	二
八五	昭和三年一月	懐中日記	二
八六	昭和三年一月	懐中日記	二
八七	昭和三年一月	懐中日記	二
八八	昭和三年一月	懐中日記	二
八九	昭和三年一月	懐中日記	二
九〇	昭和三年一月	懐中日記	二
九一	昭和三年一月	懐中日記	二
九二	昭和三年一月	懐中日記	二
九三	昭和三年一月	懐中日記	二
九四	昭和三年一月	懐中日記	二
九五	昭和三年一月	懐中日記	二
九六	昭和三年一月	懐中日記	二
九七	昭和三年一月	懐中日記	二
九八	昭和三年一月	懐中日記	二
九九	昭和三年一月	懐中日記	二
一〇〇	昭和三年一月	懐中日記	二

備忘録関係(一〇五)
上演日数記録(五五)

四六	大正 四年六月	観劇書日記(曾吉劇上演日数記録)	六九	昭和 三年八月	彼京日新聞
四七	大正 八年五月	観劇日数帳	七〇	昭和 四年八月	中日新聞(夕刊)
四八	大正 八年六月	清帳(上演日数記録)	七一	昭和 四年八月	大鏡月
四九	昭和 六年正月	正月上演出演者日次記録(當名正月登場連名)	七二	昭和 四年八月	中日新聞(夕刊)
五〇	昭和 四年正月	大寶恵(遊業日取方覚)	七三	大正 三年四月	松島細金図
五一	明治四四年三月	名古屋白粉問屋白粉通帳	七四	大正 二年六月	改正番地入東京市全図
五二	大正 元年八月	萬寶帳(盆題及場割目録)	七五	大正 二年二月	中部日本分割図(名古屋新聞附録)
五三	大正 七年八月	田中屋下駄金具製造所通帳(伊藤庄八宛)	七六	大正 五年八月	最新鉄道旅行図
五四	大正 八年七月	田中屋下駄金具製造所通帳(山口利助宛)	七七	昭和 二年八月	滋賀県全図
五五	大正 八年八月	田中屋下駄金具製造所通帳(山田宇之助宛)	七八	昭和 五年五月	名古屋市街全図
五六	大正 九年九月	佐野屋信之通帳(田中勝次郎宛)	七九	昭和 一年二月	兵庫県全図
五七	大正 一〇年七月	衣笠屋買物帳(立花家てつ子)	八〇	昭和 一年六月	愛媛県全図
五八	昭和 一年七月	萬寶帳	八一	昭和 一年八月	静岡県全図
五九	昭和 二年七月	買物覚	八二	昭和 二年八月	中央日本兼華島圖
六〇	昭和 三年	NOTE-BOOK(備忘録)	八三	昭和 二年五月	高根県全図
六一	昭和 〇年五月	江崎甚哉式会社仕切書(五八三三頁)	八四	昭和 二年五月	群馬県全図
六二	年月未詳	渡し金取記	八五	昭和 二年五月	群馬県全図
六三	〃	NOTE-BOOK(備忘録)	八六	昭和 二年五月	宮城県全図
六四	〃	備忘(立花加藤貞十)	八七	昭和 二年六月	山口県全図
六五	大正 九年四月	新聞(一息)	八八	昭和 二年八月	福井県全図
六六	大正 一〇年一月	信濃時事新聞	八九	昭和 二年八月	京都府全図
六七	昭和 四年三月	名古屋新聞	九〇	昭和 二年八月	鳥取県全図
六八	昭和 四年三月	名古屋新聞	九一	昭和 三年二月	福岡県全図
六九	昭和 四年三月	名古屋新聞	九二	昭和 三年五月	大分県全図
七〇	昭和 四年三月	名古屋新聞	九三	昭和 三年九月	鉄道地図

二九五 大正 二年二月 演芸倶楽部(第二巻第一二号)
 二九六 大正 二年四月 演芸倶楽部(第三巻第四号)
 二九七 明治四四年六月 新年号(笑)(次の第一号)
 二九八 明治四五年六月 歌舞伎(第二巻第一号)
 二九九 昭和 八年九月 新演芸(第二巻第一号)
 三〇〇 昭和 一年一月 明治・大正・昭和名優名人花形大写真真帖
 三〇一 年月未詳 ちっばん実話読物(増刊)
 三〇二 明治四二年二月 後の二かげ
 三〇三 明治 七年五月 蕨の露(著者石橋友吉)
 三〇四 明治三六年五月 当世五人男の内川上三吉(書村上信)
 三〇五 明治四年四月 小説女文(兼河原梅史)
 三〇六 明治四二年〇月 小説花化傘(兼小林誠月)
 三〇七 昭和 二年二月 十二日銀行大歌舞伎(明治座)
 三〇八 昭和 二年九月 名古屋とより(第一〇回記念)
 三〇九 昭和三年〇月 立花小唄レコード舞踏発表会プログラム
 三一〇 昭和三年三月 二年歌舞伎(御園庄善作)
 三一一 年月未詳 二月 岐阜右柳流橋頭会冊子(第15回岐阜県芸術祭)
 三一二 年月未詳 一月 福屋入場招待券
 三一三 明治四年九月 一光三尊の御仏(長野市善光寺)
 三一四 明治四二年四月 谷汲川の栗
 三一五 大正 元年二月 金比羅御生記
 三一六 大正 七年四月 長野の葉
 三一七 大正 一年四月 越後文書伝書真宗興行の徳(名古屋別院)
 三一八 大正 三年四月 信州善光寺御大聖御開帳行列図
 三一九 昭和 三年四月 剣技奇情黒熊の夢(名古屋新聞)
 三二〇 昭和 六年五月 教祖遺訓の解説(六日本神社教覚知本部)

三二一 昭和 七年二月 結婚式(明浄第七号附録)
 三二二 昭和 九年八月 官幣中在赤間宮奉賛会歳章書(下関市)
 三二三 昭和 〇年七月 荒木文右衛門小伝
 三二四 昭和 〇年二月 東京の博物館
 三二五 昭和 一年春 豊島宮案内(長崎市)
 三二六 昭和 四年〇月 国宝建造物名目古写真(名古屋城内冊子)
 三二七 昭和 三年八月 仏教に映じた支那事変(野炊秀市)
 三二八 昭和 六年三月 金刀比羅山金童案内図
 三二九 昭和 三年三月 相國聖人七百御遠忌徳徳奉讃歌
 三三〇 年月未詳 祖師橋の由来及び其構造
 三三一 尾張国知多郡新四国八十八札所道案内
 三三二 官幣中在赤間宮路記(致賀市)
 三三三 山門建立差願書(龍興杖堂総本殿)
 三三四 信州善光寺如来御縁起
 三三五 谷汲川の略縁起
 三三六 妙安寺略縁起(前橋市)
 三三七 光明院(愛知美業部)
 三三八 本光坊了願略縁起(前田)
 三三九 嫁威内附略縁起(越前國願聖寺)
 三四〇 真宗教書踊踊山浄興寺略縁起
 三四一 真宗教書踊踊山浄興寺略縁起
 三四二 観世音のゆかり(愛知郡黄松山觀音寺)
 三四三 肉弾三勇士追善和讃(旭川柳谷興隆寺)
 三四四 秋葉総本殿山門新築正面略図
 三四五 真宗
 三四六 聖徳太子

三四七 年月未詳
 三四八
 三四九
 三五〇
 三五一
 三五二
 三五三
 三五四
 三五五
 三五六
 三五七
 三五八
 三五九
 三六〇
 三六一
 三六二
 三六三
 三六四
 三六五
 三六六
 三六七
 三六八
 三六九
 三七〇
 三七一

営業の契(大阪市谷屋衣笠邸)
 日本統治前後の内
 越前市原温泉御案内
 福野神宮参拝の契
 広島県内国幣社案内記
 旅行の友
 信州善光寺秋温泉案内
 霞間ヶ谷小唄
 越前国水原町無為信寺(徳風余薫)
 金沢東六園御案内
 富山御案内(日の丸ホテル)
 愛知郡古野日輪山曼陀羅寺図説
 神樂宮案内
 金龍山茂草寺参拝記念
 神樂の祀り方(熱田神宮)
 種々集書
 長井主水御政
 小野道風骨相祝
 宮本無三四
 宮式武成英達美談
 室母後勝又兵衛
 一心多助
 一心太助
 残菊物語
 桶正成早稲城
 時代漫曲室飛松在来

三三三 年月未詳
 三三四
 三三五
 三三六
 三三七
 三三八
 三三九
 三四〇
 三四一
 三四二
 三四三
 三四四
 三四五
 三四六
 三四七
 三四八
 三四九
 三五十
 三五二
 三五三
 三五四
 三五五
 三五六
 三五七
 三五八
 三五九
 三六〇
 三六一
 三六二
 三六三
 三六四
 三六五
 三六六
 三六七
 三六八
 三六九
 三七〇
 三七一

きら港与三郎
 義太夫
 勤王教訓赤穂義士
 勤王候家小幡輝五郎
 義太夫僧侶劇
 南船里見八大伝
 通俗万宝全書
 小説業の手内
 小説一見ヶ浦日出の仇討
 富山春談松前騒動
 豪傑田舎也
 御陣九州地理八道登山権現助刻
 八幡大菩薩
 蛇鬼峠大仇討宮部武勇伝
 放駒四郎兵衛
 山中鹿之助
 旗本騒動船越八郎
 長編半兵衛
 長編謀謀小僧次郎吉
 甲賀流書の必書
 当世三人娘月照子
 郡山娘仇討
 浄瑠璃全本全書
 浄瑠璃全集
 田宮・九尾・太馬浄る利
 上る利関張勢十郎

三九九 年月未詳

浄瑠璃教談

外題關係(七二七忌)

資料年月日明辨分(二〇八点)

- 四〇〇 明治 六年八月 羅山遊
- 四〇一 明治 二年二月 刈草道心山ノ段
- 四〇二 明治 四年 般若堂江重太郎(四所抜の場)
- 四〇三 明治 五年五月 親鸞(代記、鳩矢の段)
- 四〇四 明治 一年 鬼・法眼三略巻(日が木乃場)
- 四〇五 明治 五年七月 天候水滸(勢力内の場、明神山の場)
- 四〇六 明治 五年 大高懸酒飲者
- 四〇七 明治 七年六月 坂名反古・休橋(住吉社内の場合)
- 四〇八 明治 七年六月 坂名反古・休橋(野懸跡住家の場他)
- 四〇九 明治 七年一〇月 遙山公談話
- 四一〇 明治 七年二月 御文章石山軍記(三幕目の口切)
- 四一一 明治 七年二月 御文章石山軍記(織田信長茶館の場)
- 四一二 明治 八年五月 菊野桑門家傳(高野山子別れの之ん)
- 四一三 明治 八年八月 鬼・法眼三略巻
- 四一四 明治 二年 安録千代敷
- 四一五 明治 二年 清水清春(霧の渡り場、清水寺の場)
- 四一六 明治 二年 清水清春(浅路ヶ原場)
- 四一七 明治 三年一〇月 三浦三軒屋桃山譚(加藤主計守節ノ場)
- 四一八 明治 三年三月 釜谷双松白
- 四一九 明治 五年 清水清春(食物番号号)
- 四二〇 明治 六年如月 慶長渡草外伝(序幕、返し、武藏目)
- 四二一 明治 七年七月 きのうのはた上(初幕、二幕、三幕、四幕)
- 四二二 明治 三年九月 富士三軒屋我(佐信屋敷警士使の場)

- 四三三 明治 三年九月 真書太閤記(柴大徳寺療者の場)
- 四三四 明治 三年七月 諸世理府加普(飛巻)
- 四三五 明治 三年八月 巖石碎澤布勢力(序幕、東林出入の場)
- 四三六 明治 三年九月 巖石碎澤布勢力(二幕目、勢力内の場)
- 四三七 明治 三年九月 浄瑠璃(宇和島騒動鈴木主木一代記)
- 四三八 明治 三年九月 越前要浄瑠璃本
- 四三九 明治 三年九月 山口武勇伝(二・三・四・七段目、敵討迄の種)
- 四四〇 明治 三年八月 高野山開基諸弘法大師御伝記(高野山迄)
- 四四一 明治 四年五月 小笠原忠吉若衆(岡田良助、お大の方)
- 四四二 明治 四年一月 義経千本桜、釜ヶ淵
- 四四三 明治 四年一月 有職鎌倉山
- 四四四 明治 四年一月 徳川天・坊沼大岡公裁案記
- 四四五 明治 四年二月 刈草堂門派茶談
- 四四六 明治 四年二月 伊賀越中双六(二人合捧り)
- 四四七 明治 四年八月 小栗判官落
- 四四八 明治 四年一月 別久敵官落
- 四四九 明治 四年二月 建道具帳、続き式拾場
- 四五〇 明治 四年二月 桜田御門血闘雲
- 四五一 明治 四年五月 玉柳雲籠崎文庫(舟將返雪洞の態)
- 四五二 明治 四年五月 東海道二人乍作(勳木返、辻寛)
- 四五三 明治 四年九月 佐倉義民若(渡り甚兵衛)
- 四五四 明治 四年三月 菅家増一輪、近頃河原の蓮引
- 四五五 明治 四年八月 二階玄柳生記(磯端伴藏)
- 四五六 明治 四年八月 敵討集山嶽
- 四五七 明治 一年一月 ぎし(宮本太)
- 四五八 明治 一年九月 赤垣蔵藏

- 四四九 大正 元年九月 接木娘岸の囃
- 四五〇 大正 元年九月 黒手組曲奇者
- 四五一 大正 元年九月 黒手組曲立引(伴の町の場)
- 四五二 大正 元年一〇月 重の井子別の段
- 四五三 大正 元年一二月 嵐山花五郎
- 四五四 大正 二年正月 敵討集山嶽、笠江戸小腕連引
- 四五五 大正 二年五月 安録伊賀越
- 四五六 大正 三年八月 安録伊賀越
- 四五七 大正 三年九月 吉田御殿の子振袖
- 四五八 大正 三年九月 釈迦八相記
- 四五九 大正 三年一月 宇都宮町天井
- 四六〇 大正 三年一月 安政東国歌
- 四六一 大正 四年四月 小栗判官(内ノ切難風ノ場)
- 四六二 大正 四年四月 養理婦控帳
- 四六三 大正 四年九月 越後伝言(一代記)
- 四六四 大正 四年九月 越後伝言(長石市門、桂門連理餅、少之金五郎)
- 四六五 大正 四年九月 札巻金藏入
- 四六六 大正 四年九月 御所後夜郎夜討(磯の藤勢太物語の場)
- 四六七 大正 四年一〇月 糸振本町の月
- 四六八 大正 四年一月 敵討高砂松
- 四六九 大正 四年 組御浄瑠璃(備後簿)
- 四七〇 大正 五年三月 雲霧五人男(橋本大功記)
- 四七一 大正 五年四月 男加賀見山、四ノ谷怪談雨夜鐘
- 四七二 大正 五年五月 大坂陣
- 四七三 大正 五年一〇月 風流狂言文次(上の巻、勘六家迄)
- 四七四 大正 五年一月 橋大鼓成田仇討(不動明玉彌の場)

- 四七五 大正 五年二月 橋大鼓成田仇討(綾川間裏口の場)
- 四七六 大正 六年二月 尾形新庄五音寛(西大道、東大助勘定帳)
- 四七七 大正 六年六月 月夜孝子仇討
- 四七八 大正 六年一〇月 箱根巖屋燈台計
- 四七九 大正 六年一〇月 柳生史記(但馬守の場)
- 四八〇 大正 六年一月 黄金盛伊達史録(舟倉小部)
- 四八一 大正 六年二月 日向崎非人景清(丸舞燈の段)
- 四八二 大正 七年一月 敵討高砂松
- 四八三 大正 七年七月 鐵千鳥警吏録
- 四八四 大正 七年四月 日本晴伊賀越
- 四八五 大正 七年五月 安録阿和嶋門
- 四八六 大正 七年九月 黒手組曲立引
- 四八七 大正 八年七月 親鸞上人記
- 四八八 大正 八年七月 親鸞上人記
- 四八九 大正 九年一月 山口武勇伝
- 四九〇 大正 九年一〇月 磯野前次(瀬川節前赤太物語りの場)
- 四九一 大正 九年十月 普原天神伝(空居の舞袖折の場)
- 四九二 大正 一〇年七月 二幕芝居生史記(松後弥山麓の場)
- 四九三 大正 一〇年六月 巖石碎澤布勢力(東林甚平段の)
- 四九四 大正 一〇年八月 藤川庄八郎
- 四九五 大正 一〇年十一月 飯 hands 忠臣蔵(建長寺の場)
- 四九六 大正 一〇年正月 金森大助(代記)
- 四九七 大正 一〇年六月 吾郎正宗(代記)
- 四九八 大正 一〇年七月 宇都宮釣鐘鉢
- 四九九 大正 一〇年二月 恋飛脚大和往来(新口村道行の場)
- 五〇〇 大正 一〇年三月 大坂陣(舟橋市之正)
- 五〇一 大正 一〇年三月 大坂陣(舟橋市之正)

五〇一	大正一年八月	清水清次	五二五	年月未詳
五〇二	大正一年六月	五郎正次	五二六	
五〇三	昭和四年六月	御藏先代萩(全五巻)	五二七	
五〇四	昭和五年九月	八百八舞	五二八	
五〇五	昭和五年一月	日向嶋非人景清	五二九	
五〇六	昭和九年五月	日向嶋非人景清	五三〇	
五〇七	年月未詳	資料年月未詳分(六一九巻)	五三一	
五〇八		続もの(二九六巻)	五三二	
五〇九		菅原伝授手習鑑	五三三	
五一〇		菅原伝授手習鑑(寺子座の段)	五三四	
五一〇		菅原伝授手習鑑(寺場)	五三五	
五一〇		菅原伝授手習鑑(手習屋の段)	五三六	
五一〇		手習屋(四の切)	五三七	
五一〇		増補松平下屋敷(巻幕)	五三八	
五一〇		一の谷(伏見忠徳)	五三九	
五一〇		一の谷(段目、能谷陣屋)	五四〇	
五一〇		一の谷(巻幕記(二段目巻幕))	五四一	
五一〇		一の谷(巻幕記(巻幕場))	五四二	
五一〇		一の谷(巻幕記(巻幕))	五四三	
五一〇		一の谷(伏見忠徳)	五四四	
五一〇		一の谷(二段目、能谷陣屋)	五四五	
五一〇		一の谷(巻幕記)	五四六	
五一〇		日向嶋非人景清(子別れより増の浦物語迄)	五四七	
五一〇		日向嶋非人景清	五四八	
五一〇		六郎景清平次吟分狂舟	五四九	
五一〇		近江源氏先陣館	五五〇	
五二一		近江源氏先陣館(盛岡陣屋の場)	五二五	
五二二		近江源氏先陣館(佐々木盛岡陣屋の場)	五二六	
五二三		近江源氏先陣館(母みめ)	五二七	
五二四		近江源氏先陣館(清水清次)	五二八	
五二五		近江源氏先陣館(和田兵衛忠徳)	五二九	
五二六		近江源氏先陣館(和清清次)	五三〇	
五二七		御所桜御川夜討(弁慶下掛、一幕)	五三一	
五二八		御所桜(弁慶上座の段)	五三二	
五二九		義経千本桜(権太左衛門より権左衛門迄)	五三三	
五三〇		勧進帳	五三四	
五三一		勧進帳(歌舞伎一四番目)	五三五	
五三二		勧進帳(巻巻目、巻巻目、巻巻目)	五三六	
五三三		源平布引巻	五三七	
五三四		源平布引巻(義賢討死の段)	五三八	
五三五		源平布引巻(義賢討死の段、物語り迄)	五三九	
五三六		鎌倉三代記	五四〇	
五三七		鎌倉三代記(巻幕)	五四一	
五三八		鎌倉三代記(巻幕)	五四二	
五三九		夜討曾我野陣屋(御藏、飯家より時宗迄)	五四三	
五四〇		夜討曾我野陣屋(右幕下下家問答迄)	五四四	
五四一		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五四五	
五四二		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五四六	
五四三		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五四七	
五四四		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五四八	
五四五		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五四九	
五四六		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五五〇	
五四七		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五五〇	
五四八		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五五〇	
五四九		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五五〇	
五五〇		夜討曾我野陣屋(曾我兄弟討入の場)	五五〇	

五五一	年月未詳	富士三樹曾我(由井井次郎の段)	五七七	年月未詳
五五二		富士三樹曾我(由井井次郎助の場)	五七八	
五五三		楊春助六郎連引	五七九	
五五四		本朝廿四孝	五八〇	
五五五		信州川中島輝虎配座	五八一	
五五六		給木大助記	五八二	
五五七		天下桔梗操太功記(建長寺より愛宕山迄)	五八三	
五五八		陸奥伊達実録(御殿の場)	五八四	
五五九		陸奥伊達実録(床下の場、半家の場)	五八五	
五六〇		陸奥伊達実録(対決の場)	五八六	
五六一		陸奥伊達実録(水戸海通の場)	五八七	
五六二		陸奥伊達実録(肴屋内の場)	五八八	
五六三		安達原	五八九	
五六四		安達原(一段目)	五九〇	
五六五		奥州安達原(段目)	五九一	
五六六		加藤先代萩(神杖祭文)段	五九二	
五六七		加藤先代萩	五九三	
五六八		先代萩(御川勝志)	五九四	
五六九		先代萩	五九五	
五七〇		本藏下屋敷	五九六	
五七一		忠臣蔵(前十九巻)	五九七	
五七二		忠臣蔵(全通し)	五九八	
五七三		仮名手本忠臣蔵(巻幕十九巻)	五九九	
五七四		仮名手本忠臣蔵(幕居九巻)	六〇〇	
五七五		忠臣蔵(力茶屋の場)	六〇〇	
五七六		仮名手本忠臣蔵(建中寺の場)	六〇一	
五七六		いちは仮名忠臣蔵(扇巻四十七巻建長寺)	五七七	
五七六		忠臣蔵土壇場(桂井若技之助の段)	五七八	
五七六		義士銘(赤江忠徳)(一場)	五七九	
五七六		義士銘(赤江忠徳)(一場)	五八〇	
五七六		源藏徳利の別れ(龜沢吉之助)	五八一	
五七六		大星由良之助(山科四郎の場)	五八二	
五七六		大石内成助	五八三	
五七六		大石立花(神楽川本陣の場)	五八四	
五七六		大石良雄十八(榎申開巻)	五八五	
五七六		赤穂義士四十七士伝(巻一)	五八六	
五七六		義士外伝(義兵奮闘の場)	五八七	
五七六		密取堂現記	五八八	
五七六		密取堂現記(九十九屋敷、施行齋の場)	五八九	
五七六		増補密取堂現記(宿屋の段)	五九〇	
五七六		増補密取堂現記(狐取)	五九一	
五七六		田木曾村大黒柱(窪助住家の場)	五九二	
五七六		田木曾村大黒柱(矢部原両舎の場)	五九三	
五七六		田木曾村大黒柱(輪花新徳屋の場)	五九四	
五七六		鎌千鳥曾我我実伝(中村四郎權助、右幕下問答)	五九五	
五七六		鎌千鳥曾我我(巻幕)	五九六	
五七六		鎌千鳥曾我我(巻幕)	五九七	
五七六		鎌千鳥曾我我(巻幕)	五九八	
五七六		鎌千鳥曾我我(巻幕)	五九九	
五七六		鎌千鳥曾我我(巻幕)	六〇〇	
五七六		鎌千鳥曾我我(巻幕)	六〇一	
五七六		十二時曾我(討入、問答の場)	六〇一	
五七六		小田原実記	六〇一	

六〇二	年月未詳	一角文敷四十七本(重臣蔵初段一四段)	六二八	年月未詳	花川戸連兼仇討(八ノ九幕目)
六〇三		角文敷四十七本(五段目一七段目)	六二九		花川戸連兼仇討(七幕目)
六〇四		忠臣後白書	六三〇		松竹梅三女仇討(敵討一幕初段一四段目)
六〇五		いははかな臣蔵(類矢敷四拾七本)	六三二		松竹梅三女仇討(二段目一十段目)
六〇六		忠臣いろは東記(清水一学住家の場)	六三三		松竹梅三女仇討
六〇七		忠臣いろは東記(秋山文左衛門住家の場)	六三四		敵討荒川武勇伝
六〇八		前肥後駒下駄・中編公(八尾留止)	六三三		荒川三勇士
六〇九		敵討肥後駒下駄(金吾清水寺の場他)	六三五		長州萩の磯(荒川三名)
六一〇		敵討肥後駒下駄(七幕目)	六三六		敵討吾妻之白梅(フシ堀非小家場他)
六一一		敵討肥後駒下駄(八幕目)	六三七		敵討吾妻之白梅(山中三樹立の場)
六一二		敵討肥後駒下駄(七幕目)	六三八		敵討吾妻之白梅(伝保屋五先之場他)
六一三		敵討肥後駒下駄(七幕目)	六三九		敵討吾妻之白梅(龜井戸天神社の場他)
六一四		敵討肥後駒下駄(五ノ六幕目)	六四〇		敵討吾妻之白梅(九幕目)
六一五		敵討浦の朝霧	六四二		敵討吾妻之白梅(二幕目)
六一六		情太鼓成田仇討	六四三		敵討吾妻之白梅(八幕目)
六一七		情太鼓成田仇討(序幕)	六四四		敵討吾妻之白梅(九幕目)
六一八		情太鼓成田仇討(貳幕目)	六四五		敵討吾妻之白梅(大詰)
六一九		敵討若見礎(飛水退治の場)	六四六		敵討吾妻之白梅(大詰)
六二〇		敵討若見礎(重蔵取り討の場)	六四七		天神記出合仇討
六二一		敵討若見礎(若松屋内の場)	六四八		種町貞書大詰記
六二二		敵討若見重太郎(鑼船の場)	六四九		豊臣世千鳥問書(序切)
六二三		敵討若見礎(丹後白河の場)	六五〇		豊臣世千鳥問書(二段目之口他)
六二四		岩見武勇伝	六五一		豊臣世千鳥問書(四幕目與五幕目)
六二五		花川戸連兼仇討(序幕、二幕目)	六五二		豊臣世千鳥問書(四幕目與五幕目)
六二六		花川戸連兼仇討(四ノ五幕目)	六五三		出世大問記(狐九取の場他)
六二七					鬚髯波戦記(木村兵十守屋取)

六五四	年月未詳	鬚髯波戦記(一事の別)	六八〇	年月未詳	二藁笠柳生東記(久次保彦左衛門)
六五五		鬚髯波戦記(大広間)	六八一		二藁笠柳生東記
六五六		鬚髯波戦記(長柄塚之段)	六八二		二藁笠柳生東記(柳生屋敷の場)
六五七		鬚髯波戦記(後勝又兵衛・真田幸村)	六八三		柳生宗久公御書状(吉村十郎)
六五八		鬚髯波戦記(八幕目)	六八四		柳生天先先生御書状(吉村十郎)
六五九		大坂陣難波戦記	六八五		二階笠柳生東記(柳生門前の場)
六六〇		大坂陣(内大臣秀頼・片桐主膳定)	六八六		別加賀見山觀音利生記
六六一		揚羽旗岡山東記(第一番初幕)	六八七		別鏡山全通し
六六二		揚羽旗岡山東記(第一番二幕目)	六八八		加賀見山古語錦絵
六六三		揚羽旗岡山東記(第一番三幕目)	六八九		金比羅御利生記
六六四		揚羽旗岡山東記(第一番四幕目)	六九〇		金比羅御利生記(百蔵平内之段)
六六五		揚羽旗岡山東記(第一番五幕目)	六九一		親藏聖人
六六六		揚羽旗岡山東記(第一番六幕目)	六九二		親藏聖人御伝記
六六七		揚羽旗岡山東記(第一番七幕大詰)	六九三		親藏聖人講中佐助之信伝
六六八		黄金盛伊達東縁(看屋段)	六九四		親藏聖人秘身御清渡
六六九		黄金盛伊達東縁(実川流石衛門)	六九五		元祖前島刺殺聖人絵はかきセット
六七〇		伊達の大戸(草止喜店)	六九六		親藏上人
六七一		陸奥伊達東縁(糸戸街道の場)	六九七		しんらん上人
六七二		黄金盛伊達東縁(野田屋鋪血取の場)	六九八		蓮如上人御一代記伝
六七三		高根雪伊達東縁(対決の場)	六九九		蓮如上人御一代記
六七四		高根雪伊達東縁(原田部の場他)	七〇〇		蓮如上人御一代記
六七五		高根雪伊達東縁(御殿茂南忠義の場)	七〇一		蓮如上人御おろむき講談(猿肉附之面由米)
六七六		高根雪伊達東縁(伊達老後政綱)	七〇二		蓮如上人御おろむき講談(猿肉附)
六七七		陸奥の松風	七〇三		釈迦八相記
六七八			七〇四		誠・天竺の古事釈迦八相記
六七九		実録千代(魚屋五平次住家の段)	七〇五		日蓮聖人伝

八〇六	年月未詳	日蓮聖人御法海	六三二	年月未詳	願名関口武勇伝	一
八〇七	年月未詳	日蓮聖人貞東伝	六三二	年月未詳	敵討筑後國関口赤太郎一代記	一
八〇八	年月未詳	日蓮聖人御更伝	六三三	年月未詳	敵討近江八景義名誓	一
八〇九	年月未詳	鎮西三葉月	六三四	年月未詳	敵討高砂松	一
八一〇	年月未詳	弓張月萬家鎮矢	六三五	年月未詳	日本晴伊賀復讐(郡川丹右衛門)	一
八一〇	年月未詳	平家女護鳩(俊寛鳩の鳩、橘余波の段)	六三六	年月未詳	敵討姥堂華龜山(小石川家鐘之段)	一
八一二	年月未詳	俊寛	六三七	年月未詳	佐渡・島大九討	一
八一三	年月未詳	平家女護鳩	六三八	年月未詳	金森貞記白狐の七草(細川越中守忠)	一
八一四	年月未詳	福原寺三試合剣	六三九	年月未詳	金森大助	一
八一五	年月未詳	義経腰越状(御殿五十三番叟の場)	六四〇	年月未詳	檜木山吏記(刀屋大住住家の場他二場)	一
八一六	年月未詳	義経腰越状(木村神祿日住内の場)	六四一	年月未詳	講談檜山木吏記	一
八一七	年月未詳	藤川天一坊	六四二	年月未詳	神助忠和合取組	一
八一八	年月未詳	大御談徳川天一坊	六四三	年月未詳	猿十白狐觀音利生記(大序より敵討迄)	一
八一九	年月未詳	実録徳川天一坊	六四四	年月未詳	成田利生記	一
八二〇	年月未詳	嵐山本語伝	六四五	年月未詳	天神庵法説講義事創立之伝	一
八二一	年月未詳	嵐山大和物語伝	六四六	年月未詳	蛇目降度淨法橋住家	一
八二二	年月未詳	嵐山花五部	六四七	年月未詳	三十三所寄坂和生記(山ノ段)	一
八二三	年月未詳	東鏡西佐養權	六四八	年月未詳	菅原天神記(安因の御座御場)	一
八二四	年月未詳	花之雲佐舟之權	六四九	年月未詳	天人のうた、きんじょく事	一
八二五	年月未詳	佐倉至五郎	六五〇	年月未詳	御文章石山軍記	一
八二六	年月未詳	一舞もの(二三五六)	六五一	年月未詳	石山本願寺十一代鎮如上人	一
八二七	年月未詳	鬼一法眼三略の巻	六五二	年月未詳	僧侶御台詞日記家忠	一
八二八	年月未詳	鬼一法眼三略巻(上の巻、下の巻)	六五三	年月未詳	弘法大師一代記	一
八二九	年月未詳	三勝平七酒屋	六五四	年月未詳	森の石松	一
八三〇	年月未詳	敵討藤流島(木曾山の場)	六五五	年月未詳	嵐山花五部	一
八三〇	年月未詳	関口武勇伝	六五六	年月未詳	辰見花五部	一

六五七	年月未詳	出入ノ海新町はし	六六三	年月未詳	三代記(七ノ目)	一
六五八	年月未詳	吉良の仁吉	六八四	年月未詳	船弁殿	一
六五九	年月未詳	風流男花笠文次	六八五	年月未詳	曾我敷皮問屋	一
六六〇	年月未詳	白浪五人男	六八六	年月未詳	勧進帳(野郎の場)	一
六六一	年月未詳	小町奴	六八七	年月未詳	有職鎌倉山	一
六六二	年月未詳	小町奴長吉	六八八	年月未詳	傾城石川梁	一
六六三	年月未詳	実録小町奴	六八九	年月未詳	傾城堂酒録	一
六六四	年月未詳	浪花祭孔雀無門七	六九〇	年月未詳	傾城堂分綱	一
六六五	年月未詳	俠客觀音田次	六九一	年月未詳	傾城御波鳴戸	一
六六六	年月未詳	觀音田次一代記	六九二	年月未詳	阿波鳴戸	一
六六七	年月未詳	勢力富五郎一代記	六九三	年月未詳	国説兼友摺	一
六六八	年月未詳	俠客勢力富五郎	六九五	年月未詳	添千恋郎の逢引	一
六六九	年月未詳	俠客春南傘	六九五	年月未詳	恋恨説面影(隅川の場)	一
六七〇	年月未詳	安政東男若長吉	六九六	年月未詳	横恋雪閑屋	一
六七一	年月未詳	安政東白浪	六九七	年月未詳	黒子組曲逢引	一
六七二	年月未詳	牛若小僧長吉伝	六九八	年月未詳	伊達棟忠信染分手綱	一
六七三	年月未詳	俠客牛若長次	六九九	年月未詳	恋飛脚大程	一
六七四	年月未詳	次郎長棟道中	七〇〇	年月未詳	東海道二人舟作	一
六七五	年月未詳	俠客勢力	七〇一	年月未詳	東海道五人舟作	一
六七六	年月未詳	尾州五人男小鉄譚	七〇二	年月未詳	道中膝栗毛	一
六七七	年月未詳	小鉄動動綱	七〇三	年月未詳	陽気腰脱袴草草	一
六七八	年月未詳	和田合戦女舞鶴	七〇四	年月未詳	道中嵐山囃	一
六七九	年月未詳	平相四郎物語	七〇五	年月未詳	道中濡木の龜山(關所の場)	一
七八〇	年月未詳	黒田威士替	七〇六	年月未詳	伊賀越道中双六	一
七八一	年月未詳	須磨浦早津々子	七〇七	年月未詳	伊賀越(新關所の場)	一
七八二	年月未詳	和田合戦女舞鶴(前)・松前屋五郎兵衛(一番目)	七八八	年月未詳	鳥信勝奥因双紙	一

七〇九	年月未詳	東山桜狂子	三	七三五年	年月未詳	瀧夜叉
七一〇	〃	夢余波彼兵美談	二	七三六	〃	武藏の茶瓶、赤穂の塩蔵忠貞屋敷
七一一	〃	凱馬海軍記	二	八三七	〃	関取二代親
七一二	〃	姐妃百物語	九	八三八	〃	出世相撲恨金鈿
七一三	〃	君臣船浪字和嶋	八	八三九	〃	浅間御面影金鈿
七一四	〃	江戸祭徳川源氏	四	八四〇	〃	浪花祭桶荷無用七
七一五	〃	巖石碎灘有勢力	一	八四一	〃	夏祭浪花鑑
七一六	〃	天保水滸伝	四	八四二	〃	夏祭り浪花ノ鑑
七一七	〃	三頭樂高橋新作	七	八四三	〃	筒井政談野狐三次
七一八	〃	有馬快活伝	六	八四四	〃	吾妻探御井政談
七一九	〃	三家三勇士	一	八四四	〃	藤岡長兵衛
七二〇	〃	御三家三勇士	一	八四六	〃	極附鬪隨長兵衛
七二一	〃	紀州三勇士	一	八四七	〃	金角鉤用力連引
七二二	〃	徳多三勇士	三	八四八	〃	長兵衛殿へ(横川五郎蔵より)
七二三	〃	竹之内大藏	二	八四九	〃	於森波打寄
七二四	〃	大藏の上り成	一	八五〇	〃	実伝水戸黄門漫遊記
七二五	〃	大藏廻	一	八五一	〃	水戸黄門実記筋書
七二六	〃	再大藏	一	八五二	〃	宇都宮釣天井
七二七	〃	浅間御面影金鈿	八	八五三	〃	宇都宮釣天井
七二八	〃	関取二代鏡	三	八五四	〃	嵐山姥
七二九	〃	関取二代鏡	一	八五五	〃	山姥四季の花形
七三〇	〃	極彩色娘扇	一	八五六	〃	夜雨鐘四ヶ谷怪談
七三一	〃	孝子娘尊致様	一	八五七	〃	優風流景清外伝
七三二	〃	石室通門家業	一	八五八	〃	娘景清八島日記(日向橋の段)
七三三	〃	菊童(宮酒の段)	一	八五九	〃	逢山名政談(亀井戸天神橋の場也)
七三四	〃	鎌葉山響夜叉	三	八六〇	〃	政談恋難箱

八六一	年月未詳	大岡仁政録	一	八八七年	年月未詳	古備大臣支那源
八六二	〃	基督太平記(山科閑居の場、下郎岡平)	一	八八八	〃	屋妻大八幼双紙
八六三	〃	基督太平記石新(新吉原の段)	一	八八九	〃	十二時晝夜時計
八六四	〃	五郎正宗孝子伝	二	八九〇	〃	東叡山義夫願書
八六五	〃	五郎正宗	三	八九一	〃	御所桜浦川夜討
八六六	〃	豊川利生記	三	八九二	〃	芝居御所桜三段目
八六七	〃	大久保政武藏廻	二	八九三	〃	千両轍
八六八	〃	吉田御殿子振袖(二段目、五段目)	二	八九四	〃	東登千両轍
八六九	〃	吉田御殿露の子振袖	三	八九五	〃	江戸桜清水清玄
八七〇	〃	吉田殿鹿子振袖	一	八九六	〃	清水清玄
八七一	〃	堀川藤弥太物語	一	八九七	〃	大和美酒忠貞死魁
八七二	〃	藤弥太	一	八九八	〃	立廻り帳
八七三	〃	輕野監造源太助一代記	二			一〇 脚本関係(二七色)
八七四	〃	塩原太助一代記	一	八九九	年月未詳	歌舞伎脚本(六色)
八七五	〃	小笠原	一	九〇〇	〃	黄金盛伊香珠(香屋の段)
八七六	〃	おがさわら寸書	一	九〇一	〃	良舟杉春日灯籠(一場)
八七七	〃	おがさわら寸書	二	九〇二	〃	忠臣蔵(五段目)
八七八	〃	神嘗穴口渡	二	九〇三	〃	當山狂言出世太閤記(信長御殿長屋の場)
八七九	〃	金毛丸白狐由來(安部安清開演場)	二	九〇四	〃	増補忠臣蔵(本蔵下段敷)
八八〇	〃	職伝玉童前(金藤忠)	一	九〇五	明治四三年二月	千鶴萬歳
八八一	〃	やんちや黄吉	二	九〇五	昭和二年(〇月)	青年歌舞伎・新脚本(二色)
八八二	〃	やんちや黄吉	二	九〇六	昭和三年(〇月)	阿波之塩門下之巻(若田獅子津中)
八八三	〃	橋伝義経忠文覚	二	九〇七	昭和三年	大石と立花(笠松町米野青年団)
八八四	〃	伴良義兵伝	二	九〇七	昭和三年	小町奴長吉(第三支節青年団)
八八五	〃	四季模倣	一	九〇八	昭和三年年度	赤い陣敷(藤井本郷支節青年団)
八八六	〃	四季模倣	一	九〇九	年月未詳	鬼女と網(神桜節女子部時舞劇)

九一〇	年月未詳	小町奴の長吉(米野青年団)	九三五年	年月未詳	旗州合邦社
九一一	〃	清水の名物婆さん(劇団ポトシミ)	九三六	〃	大村長門守茶臼山血判取組忠義
九一二	〃	次郎案山子(本郷青年団)	九三七	〃	実録越前委金鱈
九一三	〃	泣き笑い	九三八	〃	二階堂防書
九一四	〃	花見の仇討(静岡県安藤藩陣研究所)	九三九	〃	唐業の由來(百姓茂藤次内のはめん)
九一五	〃	水車小屋	九四〇	〃	岸松松恋鑑
九一六	〃	山小屋(東海台織紡績演劇部)	九四一	〃	奔ざくら
		演劇本(二〇九点)	九四二	〃	義賢館
		加賀藩	三	〃	山中四郎岩山家の場
九一七	年月未詳	親徳聖人御一代伝記	九四四	〃	遊艇の場
九一八	〃	黒姫姫ノ夢	九四六	〃	桑ヶボ伝吉
九一九	〃	黒トカケ	九四七	〃	雨夜傘
九二〇	〃	幼談談忠孝美談	九四八	〃	三莊大夫
九二一	〃	忠臣義臣都の礎	九四九	〃	御三年梅花赤旗
九二二	〃	牛若小僧長吉伝防書	九五〇	〃	川中島勝利山本
九二三	〃	琴比羅川生記	九五二	〃	更科勇健伝
九二四	〃	大岡政談病生屋騒動	九五三	〃	天下知枯梗漢揚
九二五	〃	岩見重太郎	九五四	〃	新版歌祭文(野崎村の段)
九二六	〃	田宮遊樂の忠僕	九五五	〃	桜川五郎藏
九二七	〃	間口武勇伝	九五七	〃	丸橋忠弥
九二八	〃	声色影芝居	九五八	〃	梅雨幸雪染
九二九	〃	翻釋西洋新	九五九	〃	赦免状
九三〇	〃	翻釋西洋話	九六〇	〃	時島部屋よりハク橋殺しまで
九三一	〃	松梅愛刷板花			求女塚身替新田
九三二	〃	ほととぎす			
九三三	〃	伊勢音頭油屋段			
九三四	〃				

九六一	年月未詳	小田原講堂礼忠孝	九八七年	年月未詳	釜ヶ淵双巴
九六二	〃	名筆賢女鑑	九八八	〃	三十三所花野山(盛坂寺の段)
九六三	〃	魁梅次の伝	九八九	〃	拍きし
九六四	〃	宮本左門之助天明知者の巻	九九〇	〃	白三話二階
九六五	〃	天下茶屋	九九一	〃	三日大守記
九六六	〃	酒屋の店先の場面	九九二	〃	除善提一休和尚
九六七	〃	忠節女夫松	九九三	〃	加賀雲遇天徳寺
九六八	〃	名存左小刀	九九四	〃	能原氏熊取長龍
九六九	〃	百か我	九九五	〃	川中嶋勝利山本
九七〇	〃	鶴岡百人一首	九九六	〃	鼠小紋東の新形
九七一	〃	八百屋お七伊達娘恋縛鹿子	九九七	〃	石土産今禰丈布
九七二	〃	萩原景節の場	九九八	〃	石知火物語
九七三	〃	湖水鏡	九九九	〃	慶安太平記
九七四	〃	千田川	一〇〇〇	〃	平井権八
九七五	〃	新進雪・手朝鑑・小三金五郎	一〇〇一	〃	安政百人男衆名屋段五郎
九七六	〃	函館文座黒田新	一〇〇二	〃	中上天綱鶴(河庄の場)
九七七	〃	妙子	一〇〇三	〃	鬼一法眼有徳せりふ
九七八	〃	蘭干物狂段	一〇〇四	〃	月のおんさらし草紙
九七九	〃	千代田藩禰福原	一〇〇五	〃	松平蘭防守
九八〇	〃	四方響智勇三略	一〇〇七	〃	佐野廉十郎
九八一	〃	松林本朝吉	一〇〇八	〃	妹背御殿ノ口
九八二	〃	松の一号	一〇〇九	〃	二時草曲舞
九八三	〃	三國無双亂重配	一〇一一	〃	夏祭浪花露衣姿頭控
九八四	〃	おうば八郎兵衛	一〇一二	〃	実孫毛合村六助
九八五	〃	永蒼徳太郎一代記			三人新兵衛
九八六	〃	梅柳染分	一〇二二	〃	

一〇三	年月未詳	新規造肥后項下駄(向井善九郎伝)	一〇三八	年月未詳	前掛け	一
一〇四	〃	岳泉新節井致談	一〇三九	〃	上着	二
一〇五	〃	引喜目	一〇四〇	〃	半纏	一
一〇六	〃	惟尾美代翁松葉	一〇四一	〃	拍子木	一
一〇七	〃	民谷の生立	一〇四二	〃	三度笠(清水次郎長)	一
一〇八	〃	岩崎谷の最后	一〇四三	〃	折り目笠	一
一〇九	〃	坂田御門血染雪	一〇四四	〃	名古屋さん座の羽織(不戒伴左衛門)	二
一一〇	〃	音間粟津原(粟津雪中、巴御前賽の場)	一〇四五	〃	松王丸の着物・羽織	三
一一一	〃	綾門五三桐(桃山御所の場)	一〇四六	〃	松王丸脚絆	四
一一二	〃	大江山酒天童子	一〇四七	〃	着物(田宮坊太郎)	二
一一三	〃	三浦大助紅梅袴	一〇四八	〃	脚絆(田宮坊太郎)	五
一一四	〃	外面不明	一〇四九	〃	着物(大石由良ノ助)	二
一一五	年月未詳	二 衣裳関係(七七点)	一〇五〇	〃	着物(大石、茶屋遊びの段)	六
一〇二六	〃	羽織	一〇五一	〃	菅原伝授手習鑑の衣裳(寺子屋の松王)	二
一〇二七	〃	風呂敷	一〇五二	〃	羽織(先代様まきおか羽織)	一
一〇二八	〃	袴				
一〇二九	〃	着物				
一〇三〇	〃	菅広				
一〇三一	〃	ズボン				
一〇三二	〃	マント				
一〇三三	〃	国民服				
一〇三四	〃	手甲				
一〇三五	〃	手巾				
一〇三六	〃	脚絆				
一〇三七	〃	帯				

大正八年「清帳」(影印)

昭和四年
 正月元旦
 清帳

十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月
島	島	島	島	島	島	島	島	島
島	島	島	島	島	島	島	島	島
三	五	三	三	三	四	五	四	二
深座	差島座	深座	島座	大黒座	実座	濱松座	東雲座	大黒座

十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月
島	島	島	島	島	島	島	島	島
島	島	島	島	島	島	島	島	島
三	三	四	三	三	四	三	四	四
吉野座	丸倉座	新島座	島座	島座	島座	島座	島座	島座

音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
三	三	四	四	三	三	三	三	四	三
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音

三座座

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
三	三	四	四	三	三	三	三	三	三
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音

音

音

音

音

音

音

音

音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
五	五	三	三	二	二	四	三	三	二
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

二月十四日

音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音
三	三	三	三	五	三	六	四	四	四
音	音	音	音	音	音	音	音	音	音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
重天長長長工 寺十座	田宮長川	丹波 田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮
三	三	三	四	二	二	三	二	二	三	二	一
甲上座	新寺座	甲上座	甲上座	新寺座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	新寺座

正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
重天長長長工 寺十座	田宮長川	丹波 田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮
三	三	三	四	二	二	三	二	二	三	二	一
甲上座	新寺座	甲上座	甲上座	新寺座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	新寺座

正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
重天長長長工 寺十座	田宮長川	丹波 田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮
三	三	三	四	二	二	三	二	二	三	二	一
甲上座	新寺座	甲上座	甲上座	新寺座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	新寺座

正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
重天長長長工 寺十座	田宮長川	丹波 田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮	陣谷田宮
三	三	三	四	二	二	三	二	二	三	二	一
甲上座	新寺座	甲上座	甲上座	新寺座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	甲上座	新寺座

五	四	三	二	一	日	月	年	三
里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場
三	四	一	二	二	二	二	二	二
十倉座	新座	長久座	陶盛座	中央座	上三座	大山座	住組劇場	西春劇場

三	二	一	三	三	二	三	二	三
里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場
二	三	一	三	三	二	三	二	三
池野劇場	日吉座	笠松劇場	八代劇場	新座	那加劇場	旭劇場	相倉座	富貴座

七	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場
一	三	二	一	三	二	一	三	二	一	三	二	一
花田劇場	三才座	巴座	寺座	新座	八代座	末座	上座	布座	笠松劇場	河上座	上座	河上座

三	二	三	二	三	二	三	二	三	二	三	二	三
里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場	里野場
二	三	二	三	二	三	二	三	二	三	二	三	二
河上座	新座	新座	宝集座	師崎座	宝座	才座	朝日座	刀城座	新座	新座	新座	新座

九	四	九	六	六	三	六	六	三	三
田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山
三	二	二	二	二	二	二	二	二	二
五月座	西邊野刺場	岐長刺場	羽加刺場	未廣座	大原座	長濱刺場	白子寺	白子寺	櫻川刺場

三	二	二	二	二	二	二	二	二	三
田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山
五月座	西邊野刺場	岐長刺場	羽加刺場	未廣座	大原座	長濱刺場	白子寺	白子寺	櫻川刺場

三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山
五月座	西邊野刺場	岐長刺場	羽加刺場	未廣座	大原座	長濱刺場	白子寺	白子寺	櫻川刺場

三	二	二	二	二	二	二	二	二	三
田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山	田邊山
五月座	西邊野刺場	岐長刺場	羽加刺場	未廣座	大原座	長濱刺場	白子寺	白子寺	櫻川刺場

廿六	廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	廿	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七		
田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	
田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	
二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
澤副場	長尾座	天神座	吉田座	大五座	和立別場	矢作別場	八幡別場	山城座	櫻井別場	本明一座	形原別場	六ヶ栗	坂本	山	三日月	六ヶ栗	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月

廿六	廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	廿	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
大盛座	宝貴座	平岡中畑	山	三日月	六ヶ栗	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月

廿六	廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	廿	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
澤副場	長尾座	天神座	吉田座	大五座	和立別場	矢作別場	八幡別場	山城座	櫻井別場	本明一座	形原別場	六ヶ栗	坂本	山	三日月	六ヶ栗	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月

廿六	廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	廿	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
大盛座	宝貴座	平岡中畑	山	三日月	六ヶ栗	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月	三日月

七月	田宮十平座	二	養老座
八月	田宮十平座	二	養老座
九月	田宮十平座	三	中野座
十月	田宮十平座	二	大學座
十一月	田宮十平座	二	陶樂座
十二月	田宮十平座	二	曙座
一月	田宮十平座	三	八幡座
二月	田宮十平座	三	和泉座
三月	田宮十平座	一	七牛座
四月	田宮十平座	二	小倉座
五月	田宮十平座	二	金山座
六月	田宮十平座	二	朝六座
七月	田宮十平座	二	市川座
八月	田宮十平座	二	市川座
九月	田宮十平座	二	市川座
十月	田宮十平座	二	市川座
十一月	田宮十平座	二	市川座
十二月	田宮十平座	二	市川座

七月	田宮十平座	二	大進座
八月	田宮十平座	二	飯野座
九月	田宮十平座	二	大進座
十月	田宮十平座	二	立山座
十一月	田宮十平座	二	可成座
十二月	田宮十平座	三	八尾座
一月	田宮十平座	二	東洋座
二月	田宮十平座	二	出町座
三月	田宮十平座	二	赤座
四月	田宮十平座	二	福助座
五月	田宮十平座	二	加賀座
六月	田宮十平座	二	加賀座
七月	田宮十平座	二	加賀座
八月	田宮十平座	二	加賀座
九月	田宮十平座	二	加賀座
十月	田宮十平座	二	加賀座
十一月	田宮十平座	二	加賀座
十二月	田宮十平座	二	加賀座

九月	田宮十平座	四	外島座
十月	田宮十平座	三	蛸子座
十一月	田宮十平座	二	中島座
十二月	田宮十平座	二	尾山座
一月	田宮十平座	四	演舞座
二月	田宮十平座	三	大黒座
三月	田宮十平座	二	政五座
四月	田宮十平座	二	北牛座
五月	田宮十平座	二	大進座
六月	田宮十平座	二	大進座
七月	田宮十平座	二	大進座
八月	田宮十平座	二	大進座
九月	田宮十平座	二	大進座
十月	田宮十平座	二	大進座
十一月	田宮十平座	二	大進座
十二月	田宮十平座	二	大進座

七月	田宮十平座	三	月の出座
八月	田宮十平座	四	小濱座
九月	田宮十平座	二	高濱座
十月	田宮十平座	三	款加座
十一月	田宮十平座	三	日比座
十二月	田宮十平座	二	八田座
一月	田宮十平座	二	堀和座
二月	田宮十平座	四	新座
三月	田宮十平座	二	池野座
四月	田宮十平座	二	高座
五月	田宮十平座	二	八代座
六月	田宮十平座	二	蘇座
七月	田宮十平座	二	蘇座
八月	田宮十平座	二	蘇座
九月	田宮十平座	二	蘇座
十月	田宮十平座	二	蘇座
十一月	田宮十平座	二	蘇座
十二月	田宮十平座	二	蘇座

一月	白石田宮	二	用常座
二月	土屋田宮	三	新柳座
三月	土屋田宮	二	梅澤座
四月	白石田宮	三	知事座
五月	白石田宮	二	新富座
六月	白石田宮	二	風采座
七月	白石田宮	二	萩原座
八月	白石田宮	二	梅澤座
九月	白石田宮	二	萩原座
十月	白石田宮	二	萩原座
十一月	白石田宮	二	萩原座
十二月	白石田宮	二	萩原座
一月	白石田宮	二	萩原座
二月	白石田宮	二	萩原座
三月	白石田宮	二	萩原座
四月	白石田宮	二	萩原座
五月	白石田宮	二	萩原座
六月	白石田宮	二	萩原座
七月	白石田宮	二	萩原座
八月	白石田宮	二	萩原座
九月	白石田宮	二	萩原座
十月	白石田宮	二	萩原座
十一月	白石田宮	二	萩原座
十二月	白石田宮	二	萩原座

四月	白石田宮	二	南座
五月	白石田宮	二	南座
六月	白石田宮	二	南座
七月	白石田宮	二	南座
八月	白石田宮	二	南座
九月	白石田宮	二	南座
十月	白石田宮	二	南座
十一月	白石田宮	二	南座
十二月	白石田宮	二	南座
一月	白石田宮	二	南座
二月	白石田宮	二	南座
三月	白石田宮	二	南座
四月	白石田宮	二	南座
五月	白石田宮	二	南座
六月	白石田宮	二	南座
七月	白石田宮	二	南座
八月	白石田宮	二	南座
九月	白石田宮	二	南座
十月	白石田宮	二	南座
十一月	白石田宮	二	南座
十二月	白石田宮	二	南座

三月	白石田宮	三	番座
四月	白石田宮	三	番座
五月	白石田宮	三	番座
六月	白石田宮	三	番座
七月	白石田宮	三	番座
八月	白石田宮	三	番座
九月	白石田宮	三	番座
十月	白石田宮	三	番座
十一月	白石田宮	三	番座
十二月	白石田宮	三	番座
一月	白石田宮	三	番座
二月	白石田宮	三	番座
三月	白石田宮	三	番座
四月	白石田宮	三	番座
五月	白石田宮	三	番座
六月	白石田宮	三	番座
七月	白石田宮	三	番座
八月	白石田宮	三	番座
九月	白石田宮	三	番座
十月	白石田宮	三	番座
十一月	白石田宮	三	番座
十二月	白石田宮	三	番座

十月	白石田宮	一	寺座
十一月	白石田宮	一	寺座
十二月	白石田宮	一	寺座
一月	白石田宮	一	寺座
二月	白石田宮	一	寺座
三月	白石田宮	一	寺座
四月	白石田宮	一	寺座
五月	白石田宮	一	寺座
六月	白石田宮	一	寺座
七月	白石田宮	一	寺座
八月	白石田宮	一	寺座
九月	白石田宮	一	寺座
十月	白石田宮	一	寺座
十一月	白石田宮	一	寺座
十二月	白石田宮	一	寺座
一月	白石田宮	一	寺座
二月	白石田宮	一	寺座
三月	白石田宮	一	寺座
四月	白石田宮	一	寺座
五月	白石田宮	一	寺座
六月	白石田宮	一	寺座
七月	白石田宮	一	寺座
八月	白石田宮	一	寺座
九月	白石田宮	一	寺座
十月	白石田宮	一	寺座
十一月	白石田宮	一	寺座
十二月	白石田宮	一	寺座

編集後記

各務原市歴史民俗資料館では、資料調査報告書の逐次刊行事業の一環として、ここに「各務原市資料調査報告書」第十五号の「市川百十郎資料目録」を発刊することになりました。

平成二年三月三日、市川百十郎（本名加藤鎮作）の未亡人で、衣裳の着付け指導に携わってこられた加藤志づゑさんから、故人の遺志をくんでということと、関係資料の一括寄託を受けました。その後、目録づくりを進めてまいりましたが、他の事業と並行して進めていたため思うようにはかどりませんでした。平成三年度に入り、目録の刊行をめざして資料整理に本腰を入れたともあって、ようやく刊行にこぎ着けることができました。

さて市川百十郎資料には、歌舞伎の外題関係をはじめとして、舞台衣裳にいたるまで、役者人生にかかわる一千九百点以上に及ぶ資料が含まれております。歌舞伎についての予備知識のないまま整理作業に携わった関係もあり、外題関係の分類にあたっては、村国座子供歌舞伎の指導者である、大谷白菊（長繩きぬえ）さんの助言を得て編集を進めてまいりました。ここに改めて感謝申しあげる次第でございます。

その間、目録集の刊行を心待ちにおられた加藤志づゑさんも、平成三年五月、刊行を見ずにお亡くなりになりました。誠に残念でなりません。心より哀悼の意を表します。

終わりにになりましたが、この報告書を作成するにあたって、ご快諾いただきました加藤慶一氏をはじめ、ご尽力いただきました多くの方々に深く感謝いたします。

平成四年三月

各務原市歴史民俗資料館

館長 三瓶 準 一

各務原市資料調査報告書第十五号

市川百十郎資料目録

平成四年三月十五日

編集発刊◎各務原市歴史民俗資料館

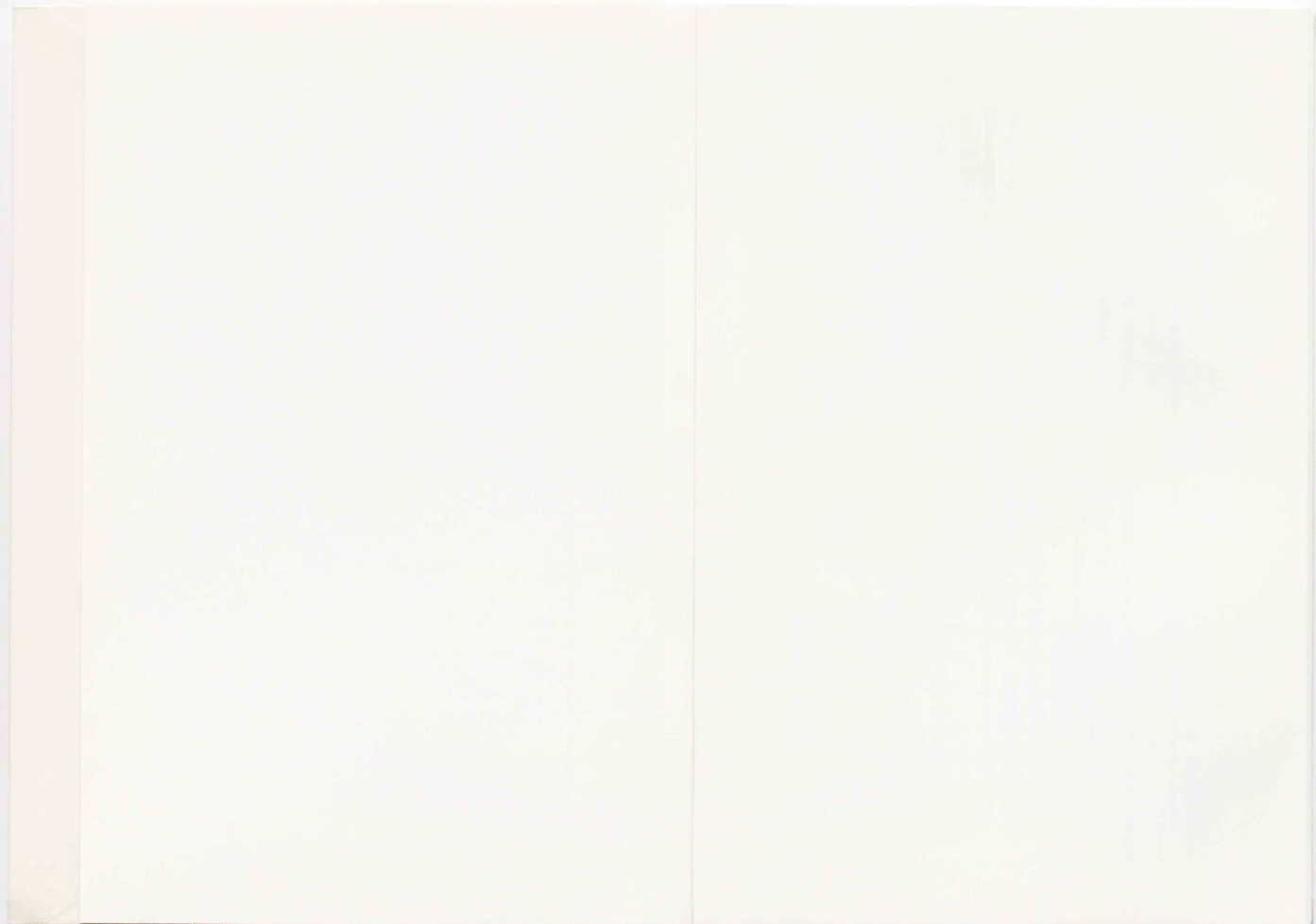
各務原市瑞穂三ツ池町六丁目三三九

☎0588(八三)二一〇(内)三三九

振替 名義五七三二各務原市

印刷 西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町一五





114884018



常熟原市图书馆

